

〈研究ノート〉

まちあるきガイドにおける観光価値の創造過程

The process of creating tourist attractions through guiding

吉岡走馬, 上田将輝, 久保静, 東岡侑
吉廣勇佑, 渡部杏奈, 米田誠司
Souma YOSHIOKA, Masaki UEDA, Shizuka KUBO, Yu HIGASHIOKA
Yusuke YOSHIHIRO, Anna WATANABE, Seiji YONEDA

2015年3月

愛媛経済論集

第34巻第3号 抜刷
愛媛大学経済学会

まちあるきガイドにおける観光価値の創造過程

The process of creating tourist attractions through guiding

吉岡走馬,* 上田将輝,* 久保 静,* 東岡 侑*
吉廣勇佑,* 渡部杏奈,* 米田誠司†

Souma YOSHIOKA, Masaki UEDA, Shizuka KUBO, Yu HIGASHIOKA
Yusuke YOSHIHIRO, Anna WATANABE, Seiji YONEDA

要約

本稿は、2006年から行われている長崎さるくをはじめとして、全国の地域で広がりを見せている「まちあるきガイド」をみていく中で、観光価値の創造過程を捉えていくものである。まちあるきガイド誕生の背景にはどのような観光形態の変化があるのか、あるいは従来型のガイドとの違いはどこにあるのかをまずみていき、まちあるきガイドの特徴である「あるく」という行為の意味や、観光ゾーンの比較的少ない地域におけるまちあるきガイドの状況から、まちあるきガイドにおける観光価値の創造過程を論じている。その結果、中でも観光ゾーンが少ない地域の方がまちあるきガイドを実施しやすいことを見出している。

序 章

観光は日々進化し、その形態を変えている。そうした観光の世界で欠かせない存在として活躍しているのがガイドであるが、そのガイドも誕生から今日まで変化し続けている。

たとえば団体旅行におけるガイドは、高度経済成長期以降の長い間、大勢の人々を引き連れ名所旧跡を巡り案内するものが主流であった。観光客もガイドは制服に身を包んだ女性が旗を持ち、マイクを使って話しながら大衆を誘導するだけのものという認識を持っていた。しかし近年そのようなガイドとは違った「ボランティアガイド」や「まちあるきガイド」¹⁾ というガイドが観光の世界に登場し、その名を広げはじ

めた。中でもまちあるきガイドは、その名の通り「まち」を案内するガイドであるものの、大勢の人を案内するものではなく、だからといって単に名所旧跡を案内するものでもないという。では、まちあるきガイドはこれまでのガイドと具体的に何が違うのだろうか。

そこで従来のガイドとまちあるきガイドの案内の仕方や役割の違いについて調べていくため、以下の二つの観点に着目することとした。一つ目はガイドが案内をする際に途中の「道のり」というものをどのように捉えているのか、そして「あるく」ことにどのような意味を持っているのか。二つ目は観光資源の少ない地域でのまちあるきガイドが地域にどのような役割を果たしているのかという疑問である。そうした疑問を明らかにするために、四ヶ所の地域のまちあるきガイドを実際に体験し、ガイドにヒアリング調査を行った。また観光ボランティアガイドとまちあるきガイドにアンケート調査を行った。

* 愛媛大学法文学部総合政策学科学生

† 愛媛大学法文学部総合政策学科講師

1) 本稿では「歩く」という手段だけではなく、交流や発見などを含むため「あるく」と表記することとする。

まず1章では、これまでの観光の変遷を概観し、その中でどのようにボランティアガイドやまちあるきガイドが誕生したのかについて述べていく。

2章では、観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの違いを考察し、中でもあるくことにどういった意味があるのかについて考えていく。

3章では、比較的観光資源の少ない地域でのまちあるきガイドの実態を調査し、まちあるきガイドが持つ役割について考える。

そして終章において、1章から3章の内容を踏まえて、まちあるきガイドによる観光価値の創造過程についてみていくこととしたい。

1章 観光におけるガイドの役割

1-1 観光の本質とその形態の変化

人は何を求めて旅をするのだろうか。癒し、食、景観、解放感、風情など観光にはいろいろな要素が挙げられる。現在、観光にはそうした様々な要素が盛り込まれ、人々を楽しませている。

では、観光はいつ誕生し、どのような歴史を辿ったのだろうか。まず平安末期に巡礼という形態で、現在の観光に似た行為が行われていたとされる。それが、熊野詣である。熊野詣とは、熊野三山（熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社、那智山青岸渡寺、補陀洛山寺）に参詣することをいう。主に京都の朝廷や公家が熊野詣に巡礼をしていた²⁾。熊野詣にはガイドブックのようなものはなく、案内役が必要不可欠であった。案内役は主に宗教者が務めた。これが「御師」と呼ばれるガイドの先駆けである³⁾。庶民に観光としての巡礼が広まったのは江戸時代であるが、伊勢参りが庶民の間で大流

行した。伊勢参りの道中は比較的楽であったため、皆こぞって伊勢へ向かうようになった。また、道中で寄り道をしてその土地の食や景観を楽しむこともあった。伊勢参りは江戸時代の民衆のニーズを満たしていたため、広く親しまれたのではないだろうか。しかし、この時代にはまだ観光を商売として扱う商人は存在しなかった。日本における本格的な旅行業は明治時代から始まっており、1879年のガイド組合結成から「ガイド」という言葉も使われ始めた。この頃から日本は国内での観光だけでなく海外の観光客も視野に入れるようになってきたことが分かる。ガイドは、日本人への案内もさることながら外国人観光客に対して日本を案内するために重要な役割を担っていた⁴⁾。

その後、今のJTBの前身であるジャパン・ツーリスト・ビューローが1912年に設立され、日本を訪れた外国人の案内役を引き受けていた⁵⁾。第二次世界大戦後、海外旅行の自由化や東京オリンピックに向けてのインフラ整備、大阪万博などの大きなイベントが行われた。それに加え、高度経済成長によって日本国民がある程度の経済的なゆとりを得はじめたことがきっかけとなり日本ではマスツーリズムが拡大した。更には、鉄道、温泉、旅館などの整備が進んだことによる修学旅行、社員旅行の流行などもマスツーリズムの拡大に影響している。そうしたマスツーリズムの拡大から、ガイドの存在というのはこれまで以上に大きなものとなっていった⁶⁾。

1-2 従来型のガイドの役割とボランティアガイドの誕生

マスツーリズムにおいて最も活躍したのはツアーガイドやバスガイドと呼ばれるガイドである。おそらく多くの人がガイドという言葉を開

2) 立教大学観光学部 (2008), 『交流文化 2008. volume 07』, p. 37

3) 旅の文化研究所 (2011) 『旅と観光の年表』 河出書房新社, p. 93

4) 同上, p. 140

5) 同上, p. 208

6) JTB 総合研究所ホームページ 〈<http://www.tourism.jp/glossary/mass-tourism/>〉 (2015年2月28日)

いたとき、初めに思い浮かべるのがこうしたガイドの姿ではないだろうか。それほど現代においてツアーガイドやバスガイドは広がりを見せてきたガイドであると言える。マスツーリズムにおいてガイドに期待される役割はいくつかあるが、中でも観光客の案内と統制という二点は特にガイドの重要な役割であると考えられる。バスなどでの移動中に観光案内を行うこと、バスを降り観光地を回る際に観光客を統制して団体行動を行わせること、名所旧跡における案内を行うこと、そうした技術がツアーガイドやバスガイドには必要とされる。

さらに昭和の終わり頃からは、観光ボランティアガイドという形態が誕生した。日本観光協会では「自分が暮らしている地域等を無料もしくは低廉な料金で、案内・紹介しているボランティアのこと」を観光ボランティアガイドと定義しており⁷⁾、2013年度時点で全国に少なくとも1,748組織、41,641人の観光ボランティアガイドが存在している⁸⁾。

佐々木によれば、観光ボランティアガイドの活動が盛んになっている背景には、地域に密着したより深い知識を得たい、新たな発見をしたいという観光客側のニーズの高まりがある一方、自己の知識を活かし観光に役立ちたい、観光客との交流や出会いを楽しみたいという地域住民側の意識の成熟があるとしている⁹⁾。また、ツアーガイドは旅行業者から現地に派遣される発地型であることに対して、観光ボランティアガイドは自分が暮らしている地域を案内する着地型であるという点も両者の大きな違いとして挙げられる。観光ボランティアガイドにはその地域の細かな歴史や文化など、現地に住んでい

るからこそその知識がある。また観光ボランティアガイドにおいて地域についての学習をすることは、自分の住んでいる地域について詳しくなるということであり、「まちのファン」づくりにつながるということから、観光ボランティアガイドの活動は、観光まちづくりにつながるという考えも近年では論じられている¹⁰⁾。

1-3 観光形態のさらなる変化とまちあるきガイドの誕生

マスツーリズムの拡大において大きく広がりを見せたガイドであるが、現代ではマスツーリズムの弊害というのも観光地において議論されるようになってきている。例えば観光開発による環境汚染や環境破壊、観光公害の発生、生活様式や地域文化の変容・破壊などである。さらにマスツーリズムでは、代表的な観光資源を持たないような地域は観光対象から外され、日本の主要な観光地とそうでない地域では格差が広がっていききっかけにもなった。持続可能な観光はこうしたマスツーリズムのもたらした弊害の反省から考えられるようになってきたものであるといえる¹¹⁾。こういったことから最近では団体型観光から個人型観光へと観光形態を変化させていくための仕組みを観光地などで実践しているケースもある。

また、観光客のニーズが多様化し、個人型観光も増加してきた。マスツーリズムがもたらした旅行の低価格化などによって、観光経験が豊かになり、成熟した旅行者は物見遊山のような観光ではなく、旅に様々なテーマを求め、自らそれを追い求める。こうした背景から団体型から個人型へ観光形態を移行させようと長崎市で行われたのが「まちあるきガイド」という新し

7) 田口秀夫・木村一裕・日野智 (2010) 『観光ボランティアガイドによる対話型情報提供の意義とその評価』【土木計画学研究・論文集 Vol. 27 no. 2 2010年9月】、p. 249

8) 公益社団法人観光振興協会 (2015), 『第5回通訳案内士制度のあり方に関する検討会報告資料』、p. 3

9) 佐々木一成 (2008), 『観光振興と魅力あるまちづくり』、学芸出版社、p. 233

10) 寺村安道 (2009), 『地域観光と地域振興－観光ボランティアガイド組織の活動事例から観光まちづくりを考える－』、RPSPP Discussion Paper No. 12, p. 13

11) 安村克己 (2008), 『いま、なぜ「観光」か? 「持続可能な観光」の教訓』、Regional Futures NO. 12 Jul. 2008, p. 5

いガイドの形態である¹²⁾ まちあるきガイドは長崎市の事例からその後全国に広がっている。

長崎市で行われたまちあるきガイドが、2006年『長崎さるく博』における「長崎さるく」ガイドである。「さるく」とは「ほっつき歩く」という長崎の方言であり、「長崎さるく博」はさるくガイドが参加者とともに長崎のまちを案内するという博覧会であった。

「長崎さるく博'06」期間中の観光入込客数の総数は355万人(宿泊客数151万人, 日帰り客数204万人)で前年同月比22万人増(6.7%増), 観光消費額も484億円と前年度比39億円増(8.7%増)となっており, 数字の上でも成功を取めている。2007年以降は「長崎さるく」として通年で実施され, 7年以上が経過した現在もおお継続し, 実施されている¹³⁾

長崎さるくガイドの仕掛け人である茶谷幸治は, まちあるきの定義を「そこに住んでいる人びとの暮らしぶりやそのまちに反映されている地域の歴史を, 直接体験すること。人びとの季節の食材, 暑さ寒さを防ぐ工夫や受け継がれてきた独特の風習などをじっくり見聞すること」としており¹⁴⁾ まちあるきガイドはそうしたものを案内するガイドとも言える。また長崎市も「長崎さるくガイド」を観光ボランティアガイドが話す専門家の歴史的な話よりは, 自分のまちに対する愛情や自分が育ったまちの自分の経験を具体的にイメージできるような話を語ることに重きをおいており, 語る内容は参加者の雰囲気に応じて柔軟に変えられ, 一方的な説明や自分の知識の披瀝とならないよう意識されている点を特徴としている¹⁵⁾

ここまでみてきたように, 観光ボランティアガイドとまちあるきガイドには重視するものに

違いがあると言えそうだ。さらに, 茶谷へのヒアリングによれば, まちあるきガイドは責任感や, やりがい等の視点から有料でガイドを行うべきであると考えている¹⁶⁾ その点においても無料, または低廉な料金でガイドを行う観光ボランティアガイドとまちあるきガイドとはまず違いがあると言えるのではないだろうか。

1-4 小括

日本におけるガイドの先駆けは江戸時代から見られ, その目的は巡礼に向かう参拝者を案内することであった。その後, 明治以降ガイドの役割は外国人観光客への案内をも担うものへと変化した。さらに, 高度経済成長期以降のマスツーリズムにおいて, 団体型の観光客に案内や統制を行う必要が出てきたため, ツアーガイドやバスガイドなどの新しい形のガイドが求められるようになってきた。このように, ガイドはその時代の観光におけるニーズに合わせて形態や役割を変化させてきたことがわかる。

観光におけるニーズが, 地域において, また観光客においても細分化されていったことによって, ガイドの形態も様々な形に分化していった。観光ボランティアガイドの誕生には, 地域の深い知識を得たいなどの観光客のニーズに加えて, 自己の知識を活かして地域貢献をしたいなどの地域住民側のニーズが高まったという背景がある。さらにまちあるきガイドの誕生には, マスツーリズムの弊害からの脱却や観光の形態を個人型に移行させていきたいという目的, 観光ボランティアガイドにみられるような歴史的知識に特化した話から, より「まち」というものに焦点を当てた観光を行ってきたいという狙いなどを背景として見ることができた。

12) 公益財団法人日本交通公社(2013), 『観光地経営の視点と実践』, 丸善出版, p.196

13) 同上, 同ページ

14) 茶谷幸治(2012), 『「まち歩き」をしかけるーコミュニティ・ツーリズムの手ほどき』, 学芸出版社, p.108

15) 公益財団法人日本交通公社(2013), 『観光地経営の視点と実践』, 丸善出版, p.196

16) 茶谷幸治氏へのヒアリング調査(2014年12月5日実施)

2章 観光ボランティアガイドとまちあるきガイド

2-1 混在する観光ボランティアガイドとまちあるきガイド

地域における身近なガイドとして、観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの二つが存在する。前章では両者の誕生や時代的な背景について述べたが、本章では両者の実態からその違いを明らかにしていきたい。

茶谷はこの二つのガイドには重視するものに違いがあることに加えて、「ボランティアガイドさんたちの活動は、私の言うところの“まち歩き”のやり方とはかなり異なっています。ボランティアガイドさんは、どうしても歴史を語ることに執着される傾向が強いし、さらに、無料でのボランティアに固執されます。」¹⁷⁾と述

べている。しかし、後に詳しく述べるガイドへのヒアリング調査においては、「両者に違いはない」という意見が数多くあった。このことから、ガイドを仕掛ける側とガイドを行う側において両者の認識がまず曖昧になっているのかもしれない。

一方で、観光ボランティアガイドとまちあるきガイドにおいて、案内した上での報酬は無料と有料のどちらがよいかという議論が存在する。元々観光ボランティアガイドは、参加料もガイドの報酬も無料ということが考えられていたため“10年ほど前まではボランティアガイドさんの報酬は無料が原則だった”¹⁸⁾一方で、まちあるきガイドにおいては、参加料を貰うことで、生活費を支えるような収入を期待する「仕事」ではないものの、暇つぶしでやれるような無責任な「お遊び」でも決していないことで

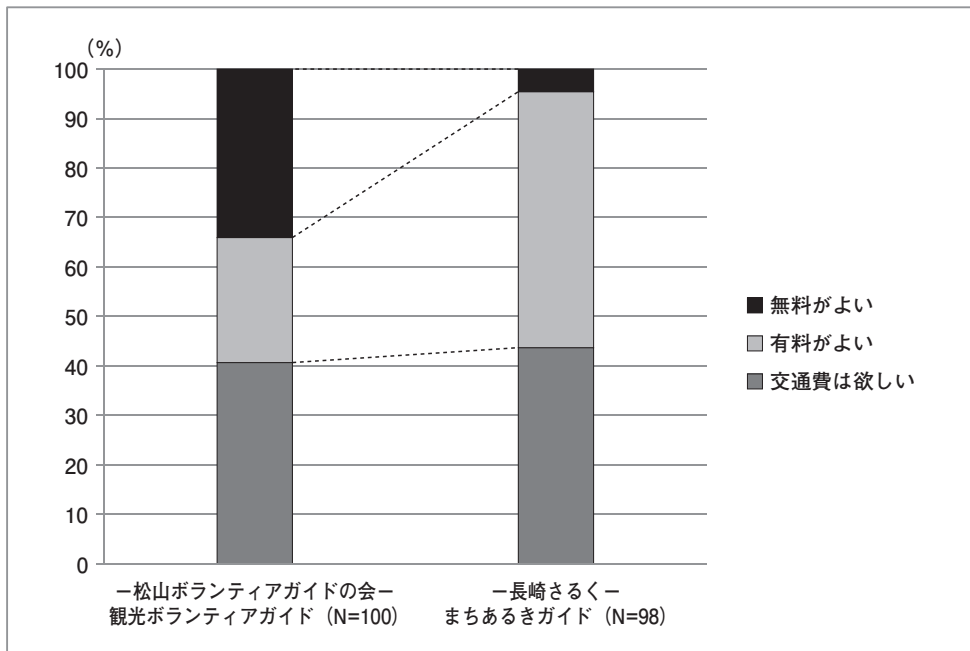


図1 ガイド料金に対するガイドの見解

17) 茶谷幸治 (2012), 『「まち歩き」をしかけるーコミュニティ・ツーリズムの手ほどき』, 学芸出版社, pp. 147-149

18) 同上, p. 155

あるとして報酬がある。だがこの両者に変化が出てきた。それは、アンケート結果(図1参照)からみることができる¹⁹⁾ 前述のように観光ボランティアガイドでは無料で案内を行いたいという意見の方が多いのに対して、まちあるきガイドでは案内を行った上でお金をもらいたいと思っている意見が多いことがまず分かった。ただ注目すべき点は、両者の共通した意見として、交通費だけはもらいたいという意見が同程度あるということである。観光ボランティアガイドは、ボランティアとして案内を行っているためお金をもらうことへの抵抗があるものの、「まちあるき」に有料参加の原則を導入したことで、ある程度のお金をもらうことができるのではないかという思いが出てきたのではないだろうか。

そしてこのような背景の中で、まちあるきガイドには観光ボランティアガイドから移行したガイドや兼任するガイドが存在している。茶谷は、核になるガイドさんを、ボランティアガイドとしてすでに活動されている方々の中から見出すという方法があるが、長崎さるくでは「まち歩き」のガイドさんを新しく募集して養成するという方法を採用している。だが、実際は、既存のボランティアガイドさんからも多くの方々が参加され、いまでも「無料」と「歴史案内」にこだわるガイドさんがいるとも述べている²⁰⁾ このことから、現状としてまちあるきガイドの中に両者が混在する形となっていることが分かる。だが、茶谷は新たに「まちあるきガイド」というものを、ガイドの新しい形として誕生させようとした。それは、これまでの既存のガイドとは違う何かをまちあるきガイドに求めていたからではないだろうか。

そこで、このような疑問点を明らかにするために、観光ボランティアガイドとまちあるきガイドにヒアリング調査とアンケート調査を実施した。

2-2 観光ボランティアガイドの事例

2-2-1 松山ボランティアガイドの会

愛媛県のほぼ中央にある松山市は、北西部の瀬戸内海に浮かぶ中島から高縄山系のすそ野の平野を経て、重信川と石手川により形成された松山平野へと広がっている。総人口516,233人(2015年1月1日現在推計人口)、面積429.06km²の市²¹⁾である。松山市では、郷土芸能である野球拳(野球の姿をさまざまに、キャッチボール、打撃の手振り身振り、アウト、セーフは審判のゼスチャーで表し、ユニフォームのままでの即興歌と踊り)²²⁾や特産品である



写真1 松山観光ボランティアガイド体験風景(筆者撮影)

19) 観光ボランティアガイド(松山ボランティアガイドの会)とまちあるきガイド(長崎さるく)に対して、ガイドに対する報酬は無料がよいか、有料がよいかという意識調査

20) 前掲, pp. 147-149

21) 松山市ホームページ 松山市の位置・気候・地形・人口 (<<https://www.city.matsuyama.chime.jp/shisei/matsuyama/iti.html>> (2015年2月27日))

22) 松山市ホームページ 郷土芸能(野球拳) (<<http://www.city.matsuyama.chime.jp/kanko/kankoguide/kyodogeino/yakyuukun.html>> (2015年2月28日))

坊っちゃん団子や五色そうめんなどが有名である。

松山観光ボランティアガイドの会は、道後温泉、松山城、坂の上の雲ミュージアム周辺を無料で案内する団体である。興味深い点として、ボランティアガイドの中でも、まちあるきガイドとしての「坂の上の雲」まち歩きというコースも3コース存在することである。観光ボランティアガイドの人数は170名（2013年9月1日現在）で平均年齢は70歳近くになる。また、松山観光文化コンシェルジュ検定を持っている方や「ふれあいふるさと塾」（自らが地域を愛し、“松山の良さ”を再認識していただくとともに、観光客の皆様を「おもてなしの心」をもって迎ええるためのホスピタリティの向上と、松山の魅力について自信を持って案内できる人材の育成を目的）²³⁾ という講座を受講した方もガイドとして活躍している。そのため、所要時間やスポットの組み合わせを自由自在にできるため、参加者に合わせて臨機応変に対応することが可能である。

2-3 まちあるきガイドの事例

2-3-1 長崎さるく

長崎市は、東アジアに近い九州の西端、長崎県の南部に位置し、長崎半島から西彼杵半島の一部を占めている。五島灘、橘湾、大村湾に面し、天然の良港に恵まれている一方、市域の背骨を通るように山稜が位置し、標高590mの八郎岳を最高点とする300mから400m級の山々が連なり、急峻で平地が少ない地形となっている²⁴⁾ 和（日本）・華（中国）・蘭（オランダ）という文化が融合して、長崎独自の文化として育まれてきた。また、観光においては世界新三大夜景に登録され、長崎ランタンフェス



写真2 長崎さるく体験風景
(筆者撮影)

ティバルが行われるなど観光業の取り組みが盛んである。

長崎さるくは、長崎県長崎市をパビリオンとし、特製マップを片手に自由に歩く「遊さるく」、長崎名物・ガイド付きまち歩きツアー「通さるく」、専門家による講座や体験を組み合わせた「学さるく」、美味しい長崎を味わう「食さるく」の四つのまちあるきの形がある²⁵⁾ 本稿では長崎さるくの中でも「通さるく」をまちあるきガイドとして取り上げる。

長崎さるくの特徴として以下の二点が挙げられる。一点目は、2006年の長崎さるく博がまちあるきブームの火付け役であるということである。近年、全国各地でまちあるきが行われているが、長崎さるくがその先駆けとして考えられている。二点目は、行政・民間・市民が一体となって企画されているという点である。市民巻き込み型のまち歩きを行うため三ヵ年計画で準備をしたことで、長崎さるく博では長崎市で

23) 松山商工会議所ホームページ〈<http://www.jemcci.jp/news/201408/furusato.html>〉(2015年2月21日)

24) 長崎市ホームページ〈http://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/790001/7920001/p007351_d/fil/02dai1syo.pdf〉(2015年2月28日)

25) 「ながさき」を歩く！ 長崎さるく公式ホームページ「長崎さるくとは」〈<http://www.saruku.info/outline.html>〉(2015年2月13日)

問題になっていた観光入込客数の減少に歯止めがかかり、市内に人の輪とお金の輪が広がり、新たに長崎市が活気づいた。

2-3-2 松山はいく

松山はいくは、2010年10月に正岡子規をはじめとする多くの俳人を輩出した松山に縁の深い「俳句」と、まちあるきを意味する「ハイク」をかけてスタートした。目的は、観光客の滞在時間の延長やその土地ならではの体験をし、満足度を高めることで、リピーターの獲得や地元の魅力を発掘すること、地域活性化を図ることである。松山はいくの最大の特徴は、行政からJTBに委託されているという点である。そのため、ガイド自身はJTBの社員として働き、他のまちあるきガイドとは異なり、観光のノウハウを持ち合わせた取り組み（コースづくりやガイド育成等）を行っている。また、価格設定が1,000円～3,000円（2015年2月13日現在）と幅広く、見たり、食べたり、学んだりと内容が充実しており、入浴できるコースがあることも松山はいくならではの特徴であると考えられる。



写真3 松山はいく体験風景
(筆者撮影)

2-3-3 すさき女子と歩く、須崎ちょこぶら 60分

高知県須崎市は、高知県のほぼ中央に位置し、人口23,488人²⁶⁾ 総面積135.46km²の、一次産業である漁業が盛んな地域である。また、市の西部を流れる清流としても有名な新荘川では、1974年にニホンカワウソの最後の生息が確認されたことから、須崎市のゆるキャラの「しんじょう君」が生まれたとされる²⁷⁾

そこで行われていたまちあるきガイド「すさき女子と歩く、須崎ちょこぶら60分」は、須崎の元気な女性5人の「すさき女子」と一緒にまちを楽しむ一時間のミニツアーである。ただしこのまちあるきは2013年度に実験的に行われていたため、2014年1月18日～2月11日の毎週土日祝日の期間限定開催であった。須崎の人や食など魅力が盛りだくさんの全8コースが設定されていて、全て「すさき女子」が楽しく企画し構成している。また、須崎市の古商家を利用し観光案内所と地域の憩いの場を兼ねた総合交流施設として作られた「すさきまちかどギャラリー」を拠点としている。



写真4 すさき女子と歩く、須崎ちょこぶら60分
体験風景 (筆者撮影)

26) 高知県須崎市ホームページ〈<http://www.city.susaki.kochi.jp/>〉(2015年1月22日)

27) 高知県須崎市ホームページ 概要〈http://www.city.susaki.kochi.jp/01_sougouannai/machino_aramashi/shino_syokukai/gaiyou/gaiyou_top.html〉(2015年2月28日)

2-3-4 ガイドと歩く，引田味めぐりツアー

引田は香川県の最東端東かがわ市の瀬戸内海に面した歴史あるまちである。漁業もさかんで、1927年には野網和三郎によって世界初のハマチ養殖に成功した。近年は人口の減少とともに産業も衰え、以前ほどの賑わいは見られなくなったが、古い町並みを生かした観光地化や、JR四国とタイアップしたイベントが進められている。特にひなまつりは有名で、毎年多くの訪問客が訪れる²⁸⁾

その引田では、引田の歴史的町並みを散策しながらハマチやしょうゆ、和三盆など地元ならではの食を楽しめるまちあるき「ガイドと歩く，引田味めぐりツアー」が行われている。ガイドの母体は東かがわ市ニューツーリズム協会で、ガイド数2名で行っている。地域出身の有名人や偉人をパペットにして共に歩くことが特徴である。



写真5 ガイドと歩く，引田味めぐりツアー体験風景（筆者撮影）

2-3-5 なつかしい路地裏まち歩き（エプロンガイド）

香川県観音寺市は、香川県の西南部に位置し、西は瀬戸内海の燧灘に面し、沖合には伊吹島などの島しょを有している。観音寺市は平成の大合併より、人口約6万6千人（2015年2月1日現在）、面積は117.47km²で、西讃地域の中心都市として重要な役割を担っている²⁹⁾

「なつかしい路地裏まち歩き」では、チケット1枚で3店舗の味めぐりをする事ができ、細い路地裏を歩きながら、なつかしいまち歩きを楽しむことができる³⁰⁾ また、一緒に歩きながら路地周辺の歴史などの解説をしてくれる“エプロンガイド”も存在する。観音寺観光協会が母体となり、10名のエプロンガイドが活動している。

これまで紹介してきた観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの比較が表1になるが、ここでそれぞれの特徴をみる事ができる。



写真6 なつかしい路地裏まち歩き体験風景（筆者撮影）

28) 東かがわ市引田ホームページ〈<http://match345.web.fc2.com/kagawa/hiketa/>〉（2015年2月27日）

29) 観音寺市ホームページ〈http://www.city.kanonji.kagawa.jp/city_n/profile.html〉（2015年2月27日）

30) 国内観光スポット・イベント情報はじゃらんnet-観音寺 なつかしい路地裏味めぐり〈http://www.jalan.net/kankou/spt_37205aa6712081995/〉（2015年2月27日）

表1 観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの比較表 (筆者作成)

	参加料	コース数	ガイド数	事業主体	備考
観光ボランティアガイド					
松山ボランティアガイドの会	無料	7コース	170名	松山観光コンベンション協会	まちあるきコース有り
まちあるきガイド					
長崎さるく	¥500	29コース	325名	長崎国際観光コンベンション協会	
松山はいく	¥1,000～ ¥3,000	15コース	4名	松山はいく事務局	
すさき女子と歩く, 須崎ちょこぶら60分	¥1,000	8コース	5名	すさきSAT まちかど ギャラリー	実験事業
ガイドと歩く 引田味めぐりツアー	¥1,800	1コース	2名	東かがわ市ニューツーリズム協会	
なつかしい路地裏まち歩き	チケット¥350 ガイド料¥500	1コース	10名	観音寺市観光協会	

2-4 観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの実態

2-4-1 ヒアリング調査

観光ボランティアガイド、まちあるきガイドにおいて、ガイドはそれぞれどのような思いをもってガイドを行っているのだろうか。そのことを探るためそれぞれのガイドにヒアリング調査を行った。

松山観光ボランティアガイドのO(男性)³¹⁾は、定年退職後時間ができ、松山のことを知ってもらいたいということからガイドを始め、無責任なことは言えないから仲間にも研修に積極的に参加してほしいとっている。また、勉強したことを話したくて参加者の求めていること以上に話し過ぎてしまうガイドがいることを問題点として挙げていた。ガイド自身にその土地の知識をちゃんと深めてほしいという思いはありながらも、参加者との折り合いがつかない部分もあるとのことだ。また、お客様が気持ちよく過ごして頂けるよう心を配ることが大切

である(50代・女性)³²⁾。歴史を説明するのが仕事である(70代・男性)³³⁾。松山城の歴史的価値をPRしたい(60代・男性)³⁴⁾といった意見も聞くことができた。

観光ボランティアガイドは、ボランティアでありながら、“責任感”や“使命感”というものを強く感じている。このことから、普段からその土地のことを多く勉強し、知識を蓄えており、その土地の知識を伝えたいという思いを持っていることが分かった。そして、たくさんの情報を参加者に伝えることや地域の代表としておもてなしをすることで、“その土地”を感じてもらいたいと思っているのではないだろうか。

一方で、長崎さるくのY(男性)³⁵⁾は以前長崎市の観光ボランティアガイドを行っていたが、現在は長崎さるくのガイドとして活動して

32) 松山観光ボランティアガイドに対するアンケート調査(2015年1月実施)

33) 同上

34) 同上

35) 長崎さるくヒアリング調査(2013年11月16日実施)

31) 松山観光ボランティアガイドヒアリング調査(2014年11月15日実施)

いる。Yは地元を愛する気持ちからガイドを始め、長崎さるくの良さはガイドによって発掘の場が違うところだと言う。また、参加者と会話をすることで元気（エネルギー）をもらえるとも言っていた。ガイドそれぞれが発掘の場が違うことで、同じコース内での違いに特徴を見出すことができるのではないだろうか。長崎市が行ったアンケート調査³⁶⁾によると、長崎さるくでは5回以上参加しているという回答が33.4%にも及び、リピーター率が高いことがわかった。これは、参加者側の需要とガイド側の供給がうまく合っている表れではないだろうか。また、松山はいくガイドのW（男性）³⁷⁾はコース内で参加者とガイドの会話の割合は5：5という風に考えており、現場を一緒に楽しむようにしていると言っていた。この他にも、私の日常や普段行っていることをコースに取り入れている（すさき女子・I）³⁸⁾ 説明というより来てくれた参加者と仲良く、楽しい時間にした（引田・M）³⁹⁾ 難しいことを言わなくていいから、参加者と話し交流したい（エプロンガイド・F）⁴⁰⁾ といった意見も聞くことができた。

これらのことから、まちあるきガイド側には参加者に楽しんでもらいたいという思いはもろんあるものの、自分自身の普段の生活を知ってもらいたいということや、ガイド自身も交流を通じて楽しみたいという思いがあることが分かった。またガイドを行うことでガイド自身も何かを得ることができるのではないだろうか。Yのように参加者から元気をもらうことができたり、参加者と交流することでその土地の良さ

を外からの目線で知ることができたり、高齢で行っている人の中には生きがいにもなっているとのことである。このように参加者とガイドの双方向の交流や効果があることが分かる。

両者のヒアリング調査により、以下に述べるような意識の違いがあるということがまず言えそうだ。まず観光ボランティアガイドは、その土地の知識を伝えたいという思いがある。一方でまちあるきガイドは参加者と交流したい、ガイド自身の日常を体験してもらいたいという思いがある。このことは言い換えれば、観光ボランティアガイドは参加者へ一方のガイドを行っていると考えることができ、まちあるきガイドは、参加者との双方向のガイドを行っていると考えられるのではないだろうか。これらはそれぞれの誕生の背景にもあるように、まちあるきガイドの前身が観光ボランティアガイドであるものの、まちあるきガイドはそれに加え“ガイド自身も楽しみながら、交流したい”という部分がプラスの思いとしてそのように出てきたということではないだろうか。

そこで、両者の違いをより明らかにするために、それぞれにアンケート調査を実施した。

2-4-2 アンケート調査

上記の意識の差異を調べるため、観光ボランティアガイド（松山ボランティアガイドの会）とまちあるきガイド（長崎さるく・松山はいく）のガイドにアンケート調査を行った。ここでは、アンケート調査の中で両者が参加者を案内する際に、何をどの程度重視しているのかについて主に説明していく。まちあるきガイドの有効回答数は、長崎さるく98、松山はいく4、計102。（ただし松山はいくにおいては、サンプル数が少ないため偏りが生じる可能性がある。）観光ボランティアガイドの有効回答数は100。計202である。

図2～図4はアンケート調査の結果を表したものである。

36) 長崎さるく通・学・食さるくアンケート調査（2014年11月実施）

37) 松山はいくヒアリング調査（2013年12月19日実施）

38) すさき女子と歩く、須崎ちょこぶら60分ヒアリング調査（2014年2月2日実施）

39) ガイドと歩く、引田めぐりツアーヒアリング調査（2014年7月14日実施）

40) なつかしい路地裏まち歩きヒアリング調査（2014年7月15日実施）

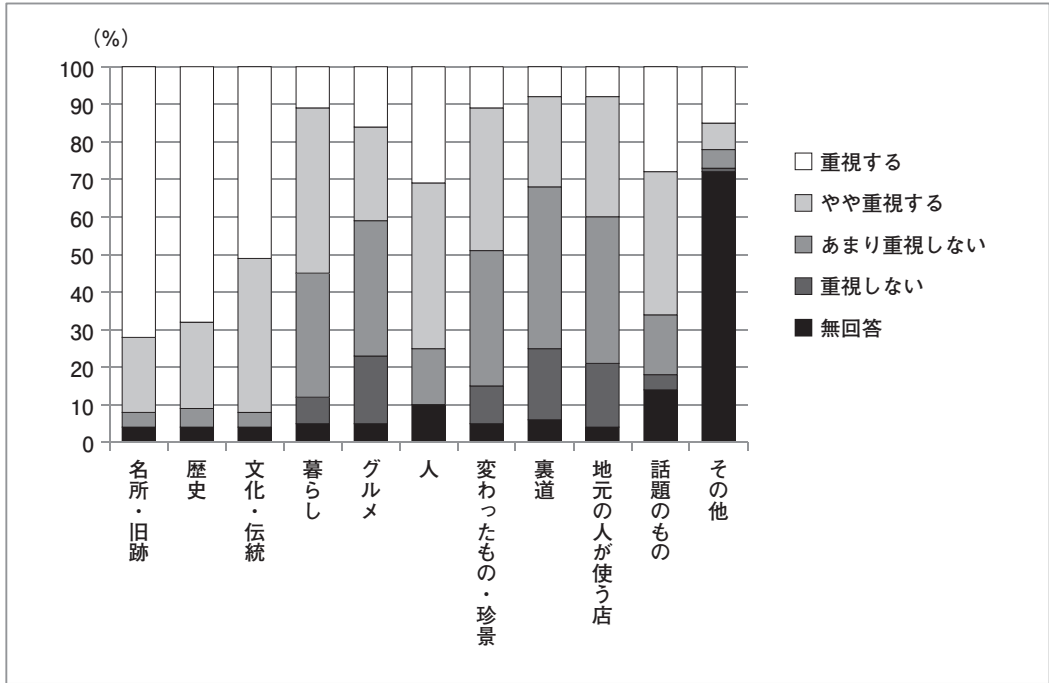


図2 参加者をガイドする際に何をどの程度重視しているか
—観光ボランティアガイド・松山ボランティアガイドの会—
(筆者作成)

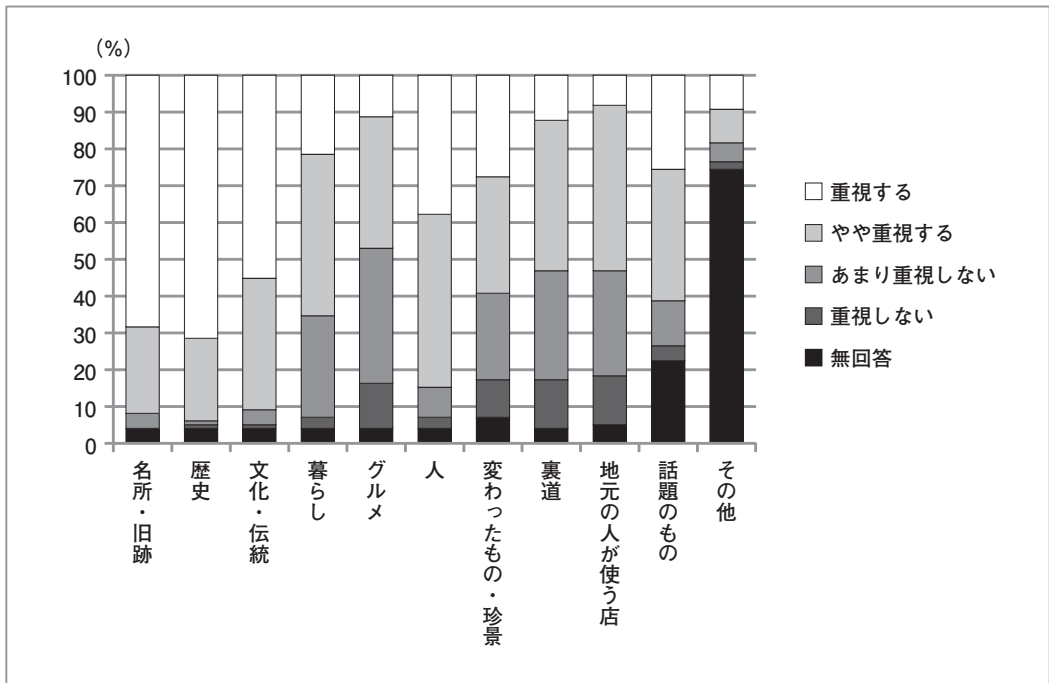


図3 参加者をガイドする際に何をどの程度重視しているか
—まちあるきガイド・長崎さるく—
(筆者作成)

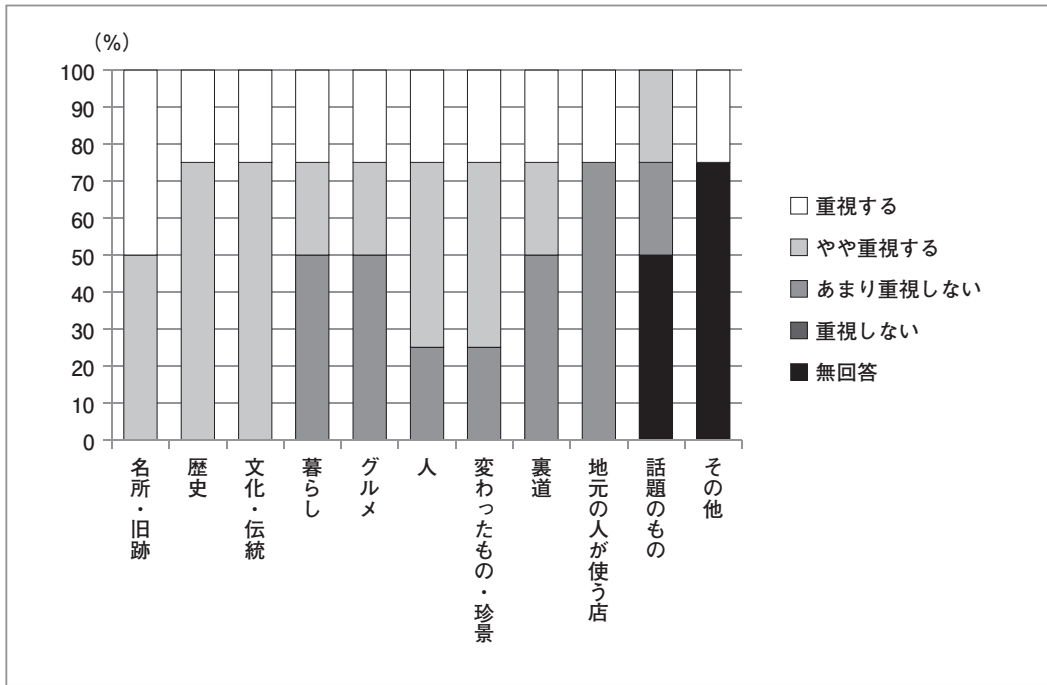


図4 参加者をガイドする際に何をどの程度重視しているか
 —まちあるきガイド・松山はいく—
 (筆者作成)

観光ボランティアガイドでは、名所・旧跡を重視すると答えた割合が70%を超え、続いて歴史、文化・伝統の項目が順に高い。この三項目はやや重視するという割合も高く、観光ボランティアガイドでは従来型の観光案内を行っていることが分かった。また、前述した“その土地の知識を伝えたい”という思いを主にこの三項目から伝えたいと思っているのではないだろうか。だがここで注目したいのは、人、話題のものという項目が三項目後につづいているということだ。このことから、名所・旧跡や歴史を重視してはいるものの、人や新たなもの・ことに注目しているということがわかる。まだ従来型の観光ガイドを行っているものの、個人型観光のニーズにより少し変化しているのかもしれない。

長崎さるくでは、観光ボランティアガイドと同じく、歴史、名所・旧跡、文化・伝統の項目について、重視する、やや重視する割合が非常

に高い。一方で、人、暮らし、裏道という項目がつづいていることから、茶谷が指摘するように「そこに住んでいる人びとの暮らしぶりやそのまちに反映されている地域の歴史を、直接体験すること。人びとの季節の食材、暑さ寒さを防ぐ工夫や受け継がれてきた独特の風習などをじっくり見聞すること」⁴¹⁾といった部分が表れていると言える。

松山はいくでは、サンプル数は少ないものの、上位三項目は前述のとおりである。特徴として、地元の人を使う店の割合が重視しているが25%、あまり重視しないが75%と意見が割れていることが挙げられる。つづいて、人や変わったもの・珍景といった項目がくる。筆者も実際にコースを体験し店に寄ることもあったが、確かに地元の人を使う店というより、老舗

41) 茶谷幸治(2012), 『「まち歩き」をしかける—コミュニティ・ツーリズムの手ほどき』, 学芸出版社, p.108

の店やお土産屋など観光客が喜ぶような場所であった。JTBに委託しているということもあり、まちあるきガイドとして活動はしているものの、長崎さるくと同じように暮らしを見せるまちあるきガイドと同一であるとは言い難い面も存在した。

2-4-3 観光ボランティアガイドとまちあるきガイドにおける意識の差異

前に述べたように、三者のガイドにおいて名所・旧跡、歴史、文化・伝統は観光形態やガイドの形態が変化しても、案内を行う上で欠かせない項目であることは間違いない。ガイドを利用する参加者の観光目的のためか、あるいは地域を知るためや教えるために代表的なものを紹介したいという思いの表れかもしれない。図5より松山観光ボランティアガイドと長崎さるくのガイドの違いが最も表れたのは裏道・珍景・暮らしの項目である。普段観光では見落としてしまいがちな部分を観光ボランティアガイドより

もまちあるきガイドが重視して案内していることが分かる。観光名所を回ることもあるものの、まちあるきガイドの参加者と交流したい、ガイド自身の日常を体験してもらいたいという思いがこの部分で現れているのではないだろうか。だが、このような点は僅かな差異を捉える中でみることができたのであるが、全体的にみると、まだまだ観光ボランティアガイドとまちあるきガイドとしての差は少ない傾向である。このことから、茶谷の考える“まち歩き”というものが、長崎さるくのまちあるきガイドにまだ伝わっていない部分もあることが明らかになった。

このように両者の意識の違いは少なからずあるものの、松山観光ボランティアガイドや長崎さるくのように大所帯の組織になると、やはり全体としての意識の統率は難しいように感じる。今後は、このような意識の差や重視している点がどこで現れるかについて考えていきたい。

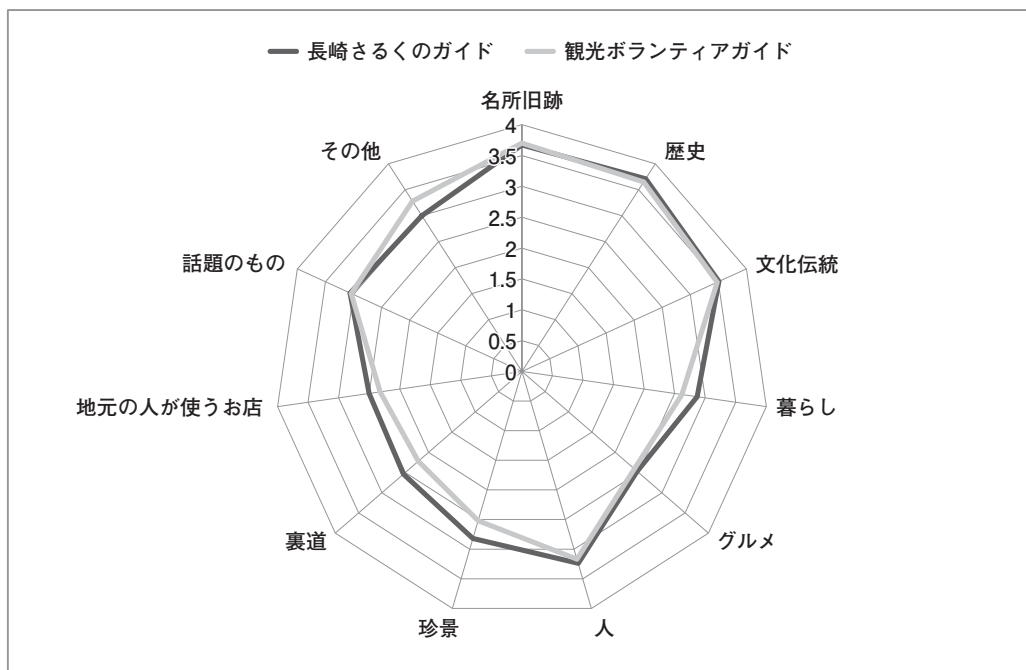


図5 松山観光ボランティアガイドと長崎さるくのガイドの意識の差異 (筆者作成)

2-5 意識の差異はどこに表れるか

2-5-1 参加者視点での差異

観光ボランティアガイドとまちあるきガイド、それぞれのガイドにおいて意識の違いが表れるのはどこなのか。その前に両者における案内の流れを筆者の体験から整理する。

観光ボランティアガイドは、スタート地点を出発後、スポットを目指して進んでいる。途中の道のりでは参加者との雑談を楽しむガイド⁴²⁾や単なる移動時間として捉えるガイドもあり、対応はガイドによって様々である。筆者が参加した松山観光ボランティアガイドのOは後者で、道のりではほとんど会話は行われていなかった⁴³⁾。スポットに着くとガイドが案内を始める。スポットは名所旧跡などの観光客向けのもが多く、案内の内容についてもそこにまつわる歴史や文化に関するものがほとんどを占めていた⁴⁴⁾。年号を含めた詳しい案内が行われることもあり、初めて訪れた観光客にその土地の観光を知ってもらうことを前提にしていると考えられる。その後、次のスポットへの移動と案内を繰り返し、最後の地点まで進む。このように観光ボランティアガイドはスポットの説明とスポットまでの移動を繰り返す形で案内が行われている。全体的に、スポットについては観光客向けに詳しく説明し、道のりではそれぞれのガイドの個性が表れているように感じた。

まちあるきガイドもスタート地点を出発後、スポットを目指して進むところは観光ボランティアガイドと違いはなかった。しかしまちあるきガイドでは道のりにおいて案内が行われていた。案内の内容は、長崎市であればそりを使ったごみ収集や金文字のお墓⁴⁵⁾、引田であれ

ば道路上の珍しい標識⁴⁶⁾など日常生活に関わるものがほとんどを占めていた。スポットにおいてもまちの日常生活にふれることができる巡り方になっているといえる。すさき女子のコースでは途中で地元の喫茶店に入り、モーニングセットを楽しんだ⁴⁷⁾。また引田味めぐりツアーでは地元の商店を順に歩き、各々の店でその土地の名物料理を食べ歩いた⁴⁸⁾。ただスポット全てが日常生活に関わるものというわけではなく、長崎さるくでは途中で大浦天主堂のような観光スポットに行く場合もある⁴⁹⁾。しかし、いずれにしてもその土地の生活空間に入ることのできるコースが多く、観光ボランティアガイドと比べると観光要素が低減されているともいえる。このようにまちあるきガイドでは道のりでもまちの日常生活を案内し、スポットにおいてもその土地の日常生活にふれることができることがわかった。

以上の説明を踏まえて、図6を見てみよう。これは先に説明した観光ボランティアガイドとまちあるきガイドのコースの巡り方の二つのパターンを図にしたものである。丸印は観光スポットであり、ガイドがコース内で立ち止まって説明を行う場所を指す。矢印は道のりで、観光スポットから観光スポットまでの間を指す。

両者の一番の違いは、道のりに重点を置くかどうかではないだろうか。前節より観光ボランティアガイドは観光スポットにおいて、参加者にまちの歴史や文化を知ってもらうことを目的としていると考えられる。一方のまちあるきガ

42) 松山観光ボランティアガイドに対するアンケート調査 (2015年1月実施)

43) 松山観光ボランティアガイドヒアリング調査 (2014年11月15日実施)

44) 松山観光ボランティアガイドヒアリング調査 (2014年11月15日実施)

45) 長崎さるくヒアリング調査 (2013年11月16日実施)

46) ガイドと歩く、引田味めぐりツアーヒアリング調査 (2014年7月14日実施)

47) すさき女子と歩く、須崎ちょこぶら60分ヒアリング調査 (2014年2月2日実施)

48) ガイドと歩く、引田味めぐりツアーヒアリング調査 (2014年7月14日実施)

49) 長崎さるくヒアリング調査 (2013年11月16日実施)

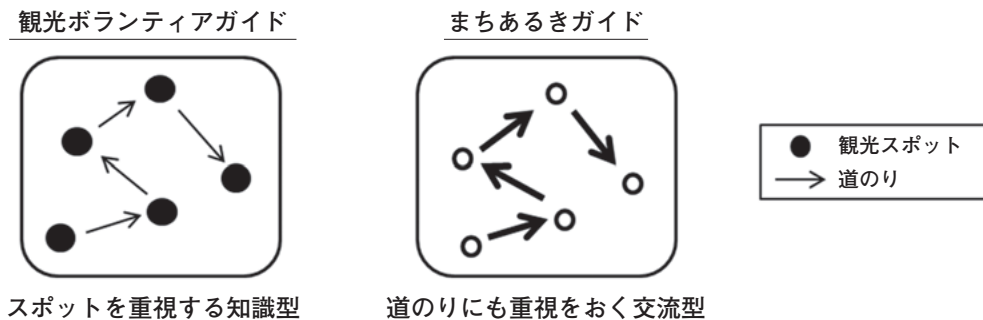


図6 観光スポットと道のりからみたガイドの2つのパターン
(筆者作成)

イドは道のりにおいて、日常生活を通してまちや人にふれ、その土地ならではの体験をもらうことを重視していると考えられる。筆者はそれぞれの特徴をみて、観光スポットを中心にまちの歴史を伝える観光ボランティアガイドを“知識型”、道のりを中心にまちの生活とふれあうまちあるきガイドを“交流型”と位置づけてみた。

茶谷は「まち歩き」について「単なる観光集客手法という機能を超えて、市民が、住民がまちにかかわるきわめて具体的、直接的な手法である」⁵⁰⁾と述べている。まちあるきは住民がまちに関わる手法であることから、まちあるきガイドがいることで道のりにおいて住民の日常生活にふれることができるのではないだろうか。

2-5-2 ガイドの重視度

前節で、観光ボランティアガイドは観光スポットを中心にまちの歴史を伝える“知識型”、まちあるきガイドは道のりを中心にまちの生活とふれあう“交流型”の二つに分類できると述べた。しかしガイド自身はそれぞれ“知識型”と“交流型”というようなことを意識して案内を行っているのだろうか。そこで、松山観光ボ

ランティアガイドと長崎さるくの両ガイドに、観光スポットと道のりを案内する際、何を重視して案内しているのかについて前述のアンケート調査を行い、両者の違いを考察することにした。

図7、図8は松山観光ボランティアガイドと長崎さるく双方のガイドが、何を重視して案内を行っているのかを観光スポット(図7参照)と道のり(図8参照)に分けて表したものである。数値は1～4であるが、1が「重視していない」、2が「あまり重視していない」、3が「まあまあ重視している」、4が「重視している」を表す。項目についてはそれぞれ各場面での説明、参加者との会話、参加者への新たな発見の促し、案内時間の調整の他、観光スポットにおいてはその場所における体験、道のりにおいては道中の統制を追加項目としている。

上記のアンケート結果より、松山観光ボランティアガイドと長崎さるく、両ガイドとも全項目において高い数値になっており、両者の間には大きな違いは見られなかった。次にガイドからみた観光スポットと道のりを比較したい。両ガイドとも差がでている項目として説明が挙げられる。それを表したグラフが図9である。

松山観光ボランティアガイドでは90%以上のガイドが観光スポットでの説明を重視・やや重視している。一方で道のりの説明になると重視・やや重視する割合が約70%となり、残り

50) 茶谷幸治(2012),『「まち歩き」という手法と「まちづくり」』,『都市計画61(1)』,日本都市計画学会, p. 28

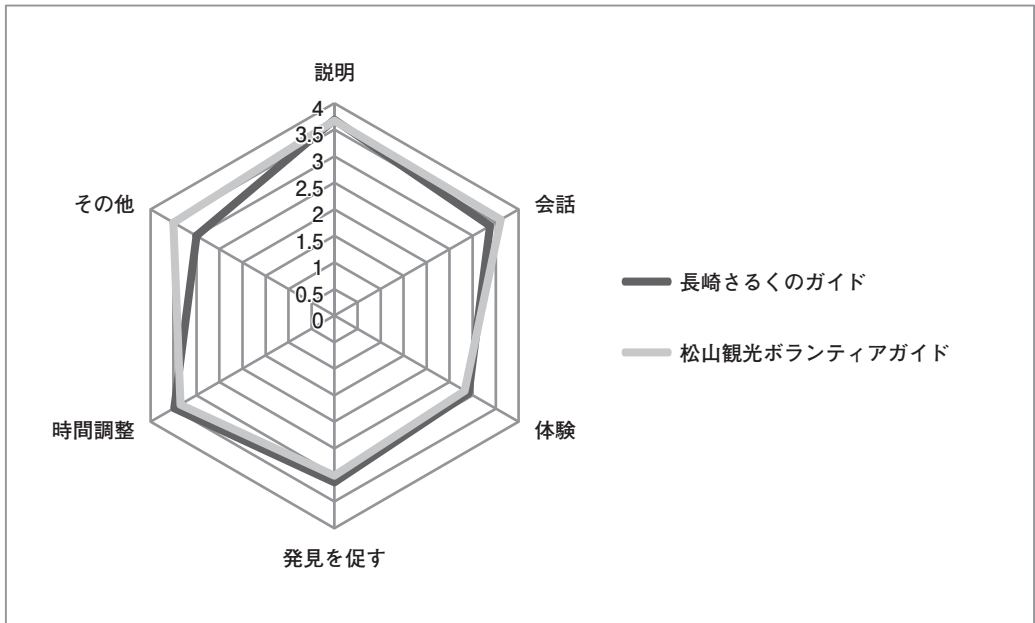


図7 観光スポットにおけるガイドの重視度
(筆者作成)

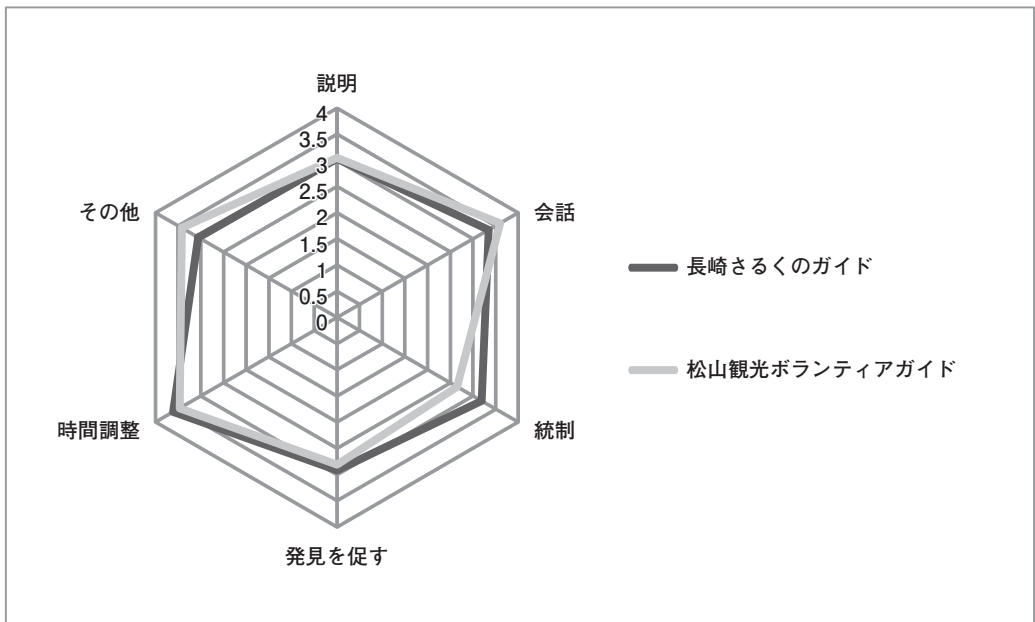


図8 道のりにおけるガイドの重視度
(筆者作成)

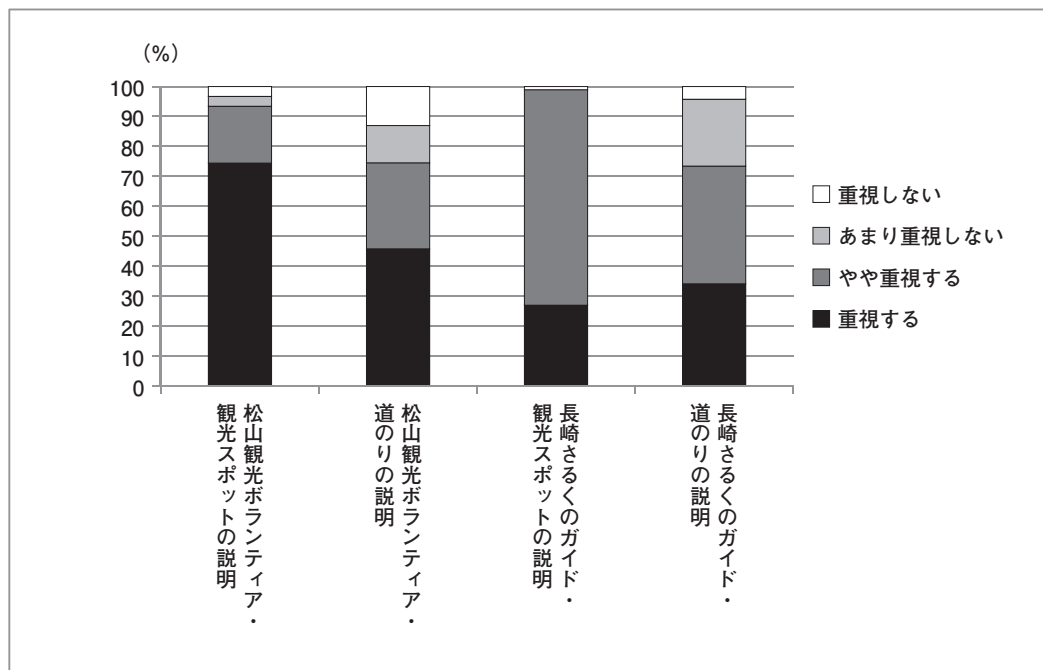


図9 観光スポットと道のりの説明についてのガイドの重視度 (筆者作成)

約30%があまり重視しない・重視しないとしている。松山観光ボランティアガイドは、観光スポットを中心に巡るガイドであることから観光スポットにおける重視度は高く、道のりにおける重視度は観光スポットと比べると低くなっていると考えられる。

次に長崎さるくを見ていく。長崎さるくではほぼ全てのガイドが観光スポットでの説明を重視・やや重視している。しかし道のりの説明では重視・やや重視する割合が約70%となり、残り約30%があまり重視しない・重視しないとしている。長崎さるくではまちあるきガイドにも関わらず観光スポットの説明の方は高く、逆に道のりの説明については重視度が低い結果となった。観光ボランティアガイドとの分化を図る目的で茶谷がプロデュースを行った長崎さるくではあるが、案内を行うガイドの方はその違いがまだ明確でない面があり、現状としてはまだ観光スポットを重視する観光ボランティアガイドの一面が残っているようにもみることが

できる。

このことから、ガイド自身は観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの区別はあまりできていないことが分かった。特に長崎さるくでは観光スポットにおける重視度は高いものの、道のりにおける重視度は松山観光ボランティアガイドとほとんど変わらないという結果が出ている。道のり重視型のまちあるきガイドとして誕生した長崎さるくが、観光スポット重視型の松山観光ボランティアガイドとほとんど違いがないという状況から考えると、まちあるきガイド内においても観光ボランティアガイドとの差異の認識があまりなく、両者の分化が今後の課題であることが分かった。

2-6 まちあるきガイドにおけるあるく意味

2章の冒頭でも説明したように、観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの違いについては実は曖昧な点が多いと考えられる。特に観光ボランティアガイドがまちあるきガイドに移

行することは、両者の混在を招いている要因の一つだとも考えられる。長崎さるくには既存の観光ボランティアガイドが多く参加しており、今でも「無料」と「歴史案内」にこだわるガイドがいることがアンケート調査から分かった⁵¹⁾案内する項目についても名所・旧跡、歴史、文化・伝統の重視度が観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの両者において高く、ガイドをする上で欠かせないものとなっていることが分かる。さらに案内途中に重視する項目についても、両者とも観光スポット・道のりともに大きな差異はない。このことから、観光ボランティアガイドとまちあるきガイドが分化されておらず、両者における違いが曖昧になっているといえるのではないだろうか。

しかし、ヒアリング調査において両者における考え方はそれぞれ異なることは前節で述べたとおりである。観光ボランティアガイドはボランティアでありながら、“責任感”や“使命感”を強く感じ、蓄えたその土地の知識を伝えることで地域の代表としておもてなしを行い、“その土地”を感じてもらいたいという考えを持っていると推測できる。一方まちあるきガイドは、参加者に楽しんでもらいたいという思いとともに、その土地の暮らしぶりや生活を知ってもらうこと、ガイド自身も交流を通じて楽しみたいという思いがあると推測できる。この両者における考え方の違いから、まちあるきガイドにおいて“あるく”行為の意味を見出すことができるのではないだろうか。

以上を踏まえた上で、まちあるきガイドにおける“あるく”意味を考えていきたい。茶谷は「名所から名所へ移動する『→』の部分」が『まち歩き』の魅力で、名所そのものよりも途中の『まち』こそが重要⁵²⁾と話している。「名所」は観光スポットに、「→」は道のりに置き換え

ると、前節で説明した観光スポットと道のりに当てはまる。まちあるきガイドでは「→」の部分、つまり道のりに重点を置いてガイドし、まちの日常空間をあるくことで参加者に楽しんでもらい、その土地の暮らしぶりや生活を知ってもらえると考えられる。また茶谷は「赤裸々な人間同士が赤裸々な生活環境とぶつかり合うのが『まち歩き』⁵³⁾とも述べている。まちあるきガイドを行う上で参加者に見せているのは、道のりで目にするありのままのまちということなのだろう。それに合わせて、スポットにおいてもその土地の生活を感じることができものにし、すさき女子や引田味めぐりでも地元のお店をスポットとしてガイドを行っていることがその例として考えられる。

観光ボランティアガイドとの分化を図る上では、やはりまちの日常生活を案内することがまちあるきガイドに必要なことではないだろうか。ガイドと一緒にあるくことで、まち本来の姿を見聞きすることが、まちあるきガイドにおける“あるく”意味であるということが出来る。

3章 観光ゾーンが極めて少ない地域におけるまちあるきガイドの可能性

3-1 「地域資源」におけるまちあるきガイドの価値

前章では、観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの意識の差異や道のりにおけるあるく意味について考察した。本章では、観光における日常空間と非日常空間の関係について整理し、まちあるきガイドにおいて地域資源とは何か、またそれがどのように観光資源に変化し、まちあるきガイドの中で価値が創造されているのかを考察する。そこで長崎や松山のような一般的な観光地と、そうでない地域（高知県須崎市、香川県東かがわ市、香川県観音寺市）で展

51) 松山観光ボランティアガイドに対するアンケート調査（2015年1月実施）

52) 茶谷幸治（2012）、「『まち歩き』をしかけるーコミュニティ・ツーリズムの手ほどき」、学芸出版社、p.109

53) 同上、p.13

開されるまちあるきガイドの特徴や違いについて見ていきたい。

3-1-1 まちあるきガイドの価値

まちあるきガイドにおいては、日常と非日常、そしてそれらの関係性は大きな意味をもつ。たとえば米田は、旅や観光には日常のものと非日常のものが共存するとしている⁵⁴⁾。そもそも地域は主に日常から成り立っているが、そうした日常が外の目からすれば非日常に映ずることがある。つまり、人が旅で訪れた地域で感じた非日常は、その地域住民の立場からすれば日常であるかもしれない。筆者の暮らす松山市で例えるならば、日常空間の中に道後温泉や松山城などの非日常空間が溶け込んでいる。このような非日常空間に地域住民が立ち寄る機会は少ない。一方で、観光客が松山に訪れた際立ち寄るのはこのような非日常空間が主である。つまり、多くの観光客はその地域の非日常空間のみに触れ、あたかもそのまちを知った気のように感じる。しかし、長崎さるくガイドでは、グラバー園や大浦天主堂などの非日常空間に加え、市民がすり鉢状の地形で営む生活などの日常空間をも参加者に案内していた。このように、まちあるきによって地域の非日常空間と日常空間を二つの視点からとらえ、地域を歩きながらまちを全体として認識することがまちあるきの特徴であり、価値だとまずいえるのではないだろうか。

また茶谷は、“まちを注意深く歩くことで、まちの地肌に触れ、吐息を感じ、情感を交わすことができる、これが、本来の観光の味わいではないか”⁵⁵⁾としている。今日まで人々は、高度経済成長期以降のマスツーリズムに浸り、観

光バスなどで名所旧跡を回り、あたかもそれだけでそのまちを知った気分になり、旅本来の出会いや楽しさ、地域での交流などの趣を忘れているのかもしれない。つまり、現代人の大半が旅でまちを訪れたとしてもまちの一部でしか捉えていないこともあると考えることもできる。茶谷はこの一部を「ウソッパチの派手なコケ脅し」⁵⁶⁾ 都市(まち)の日常を「地味なホンモノ」⁵⁷⁾とそれぞれ表現しているが、今回対象としている長崎では、この地域の日常を見せることで観光客の増加に成功したのである。



写真7 高知県須崎市の住民がよく使用する鮮魚店へガイドに案内される様子(筆者撮影)



写真8 愛媛県喜多郡内子町の古民家がある街並み(筆者撮影)

54) 米田誠司(2014)、「観光と日常の境界をめぐってーまちあるきガイドからみる一考察ー」、『第29回日本観光研究学会学術論文集』, pp. 183-184

55) 茶谷幸治(2012)、『「まち歩き」という手法と「まちづくり」』、『都市計画61(1)』, 日本都市計画学会, p. 27

56) 同上, 同ページ

57) 同上, 同ページ

また、まちあるきによって観光客が感じることができない非日常は、住民からすれば当たり前のもの（日常）であることが多いものの、その地域にしかない良さあるいは価値というものは、地域の外からのまなざしがなければ発見や認識がされずにそのままになっていることも多い。つまり、まちを注意深く見ることで、地域の潜在化した資源が浮かび上がるのではないだろうか。

一方で、日常空間を参加者にみせることによって、住民の生活やプライバシーが脅かされてしまうという問題や、参加者が地域住民から受け入れられないという問題も起こりうる。しかし、地域住民がよく使用するお店（写真7参照）、地域の暮らしぶりがよく見てとれる路地裏や、古民家がある町並み（写真8参照）など、観光客が立ち入りにくい場所に、まちあるきガイドがいることで地域住民の理解が得られる。つまり、まちあるきガイドが地域住民と参加者との間に仲介役として機能することで、そうした問題の解決の糸口を見出すことも難しくなくなるということもできる。

3-1-2 「地域資源」におけるまちあるきガイドの価値

次に、まちあるきにおける地域資源について論じてみたい。茶谷によれば、まちあるきは、「そこに住んでいる人びとの暮らしぶりやそのまちに反映されている地域の歴史を直接体験する」⁵⁸⁾ こととしている。このことから、まちあるきガイドにおける地域資源とは、その地域に住む人、モノ、文化、歴史、景観、食、出会い、体験などがそれにあたるといえる。また、地域資源が地域に眠っているとすれば、その資源をまちあるきガイドが掘り起こし、参加者である観光客に見せるという行為の中で、地域資源が観光資源に変化していると言える。一方

で、感度のいい観光客が観光資源として見つける場合もあるだろう。また単に見つけるのではなく、それをさらにガイドが掘り起こし、そこに説明が加わることで価値が深まることも考える。このようにまちあるきガイドのコースに参加する観光客がガイドに案内されながら、まちを歩くことによって観光客の視点から新たに資源が発見される（観光客が受け手から自発的になる）ことでも、観光資源が創造されることがある。この二つの作用がまちあるきガイドの魅力を高める要因になり価値を生むのではないだろうか。

さらに、人や文化や歴史、出会い、発見などが地域資源であるとき、その種類や量は地域によって異なるが、茶谷が述べるようにどのようなまちにも潤いのある地肌⁵⁹⁾（魅力的な文化や歴史）が存在することから、観光資源への変化の可能性と期待値はその地域がまちあるきガイドをおこなう限り、無限あるいは未知数であるといえる。そこにもまちあるきの面白さがうかがえる。

つまり、まちあるきガイドの感性と観光客の感性が相互に関わり合うことで、初めてまちあるきが機能する。なお、観光客の感性を有効に引き出すためには、まちあるきガイドの感性がもっとも重要になる。このように地域の内からの目線と外からの目線の相互作用によってもまちあるきの価値が見出される。例えば、観音寺の「なつかしい路地裏まち歩き」の体験より、まちあるきガイドが見落としている地域資源（年代ものの自動販売機“写真9参照”、トマソンを彷彿とさせる不思議な赤いドア“写真10参照”）を観光客の目線から発見するということが実際に起こった。しかし、この発見はまちをじっくり見ることをまちあるきガイドから参加者に促された結果の事例であった。

58) 茶谷幸治 (2012), 『「まち歩き」をしかけるコミュニティ・ツーリズムの手ほどき』, 学芸出版社, p. 108

59) 茶谷幸治 (2012), 『「まち歩き」という手法と「まちづくり」』, 『都市計画 61 (1)』, 日本都市計画学会, p. 28



写真9 香川県観音寺市の年代ものの自動販売機
(筆者撮影)



写真10 香川県観音寺市の不思議な赤いドア
(筆者撮影)

つまり、まちあるきガイドの能力や魅力が要求されるため、観光客に対し、まちあるきの本質（まちの埃の取り除き方⁶⁰）をうまく伝授し、まちあるきに興味を抱かせなければ、まちあるきが有効に機能しないという問題が起こりうる。この問題は、長崎で体験したまちあるきガイドからも感じられた。ガイドが説明に夢中になりすぎて参加者よりも先に歩いて行ってしまうこと、必要以上の説明や情報を話しすぎて参加者が退屈するということがそれにあたる。まちに資源が存在していてもそれを伝えるガイドがまちあるきの本質をうまく参加者に伝え、まち（地域資源）に興味を抱かせる工夫が

不可欠である。この行為を怠れば、参加者がまちに対して抱く面白みやそのまちへまた行きたいという思いが薄れてしまい、再度訪れる可能性が減少するのではないだろうか。つまり、ガイドの魅力がそのまちの魅力に大きく関係し、参加者をまちに引き付ける上で重要な要素になるといえる。

茶谷は長崎さるくを観光客を集客させるという目的を達成する手段（システム）やまちの素材を素直にみせる（日常性そのものの都市を披露する）方法として成功と位置付けている⁶¹。しかし、数百人規模のガイド組織を持つ長崎さるくでは、すべてのガイドがまちあるきガイドに求められる役割を果たしているとはいいがたいと今回の調査や体験から感じた。このように長崎さるくのような観光資源が多い地域におけるまちあるきの問題点がみえてきた。このことから、まちあるきを有効に機能させられるか否かは、ガイドにより左右されるといえる。

どんなに質の良いまちあるきを企画しようとも、それを伝えるガイドがまちあるきの趣旨を理解し、独自に工夫しなければ、まちあるきの魅力が伝わらない。これは、長崎さるくだけに限って言えることではない。今日、全国に広がりつつあるまちあるきガイドと観光ボランティアガイドとの混在（例：松山はいくと松山観光ボランティアガイドの存在）がまちあるきガイドの存在を不明瞭かつ不十分なものになっている要因のひとつではないだろうか。そうであるならば、今後まちあるきガイドを有効に機能させるためには、長崎さるくのように巨大化したガイド組織の統率を図ることや、松山市などの都市における観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの差別化をはかることなどがまず求められる。一方で茶谷がヒアリングで述べていた、大阪で行われている「大阪あそ歩」や、名

61) 茶谷幸治 (2012), 「『まち歩き』という手法と『まちづくり』」, 『都市計画 61 (1)』, 日本都市計画学会, p. 27

60) 同上, p. 26

古屋で昨年開催された「やっとかめ文化祭」の動きは、さらなる交流や資源の深い掘り起こしでもあり、まちあるきガイドの次のステージを感じさせるものである。

3-2 観光ゾーンが極めて少ない地域における まちあるきガイドの状況

次に、観光ゾーンが極めて少ない地域でのまちあるきガイドについて、現地での調査からその意義について検証してみたい。三つの事例とは、高知県須崎市で行われているまちあるきガイド「すさき女子と歩く、須崎ちょこぶら60分」、香川県東かがわ市引田で行われているまちあるきガイド「ガイドと歩く、引田味めぐりツアー」、香川県観音寺市で行われているまちあるきガイド「なつかしい路地裏まち歩き」である。

3-2-1 高知県須崎市【すさき女子と歩く、 須崎ちょこぶら60分】

筆者は高知県須崎市で行われていた、「すさき女子と歩く、須崎ちょこぶら60分」のうち、「すさきの日常を体験！ 常連さんが集う喫茶モーニングを食べよう!!」と「なりきり！ 須崎の歴史をちょこっと見聞散歩♪」の二つのコースを体験調査した。

「すさきの日常を体験！ 常連さんが集う喫茶モーニングを食べよう!!」

このコースは、ガイドのIがいつもモーニングを食べに通う喫茶店に参加者を案内し、一緒に食事をするという内容をメインに組み立てられている。Iは、ほぼ毎日の頻度でモーニングを食べに行く。そのような習慣を地域住民が普段利用する商店街など、須崎に住む自分たちの日常の一部を体験してもらいたい⁶²⁾ という思いに、Iがこのコースを企画した理由の根底がある。そして、その日常を通して人に会っても

らうまちあるきをしたいと述べていた⁶³⁾ モーニングを食べた喫茶店の店主が手作りの猪の肉じゃがをプレゼントしてくれたことや、商店街の朝市を見て歩いているだけでも気さくに話しかけてくれたことから、コース内容には組み込まれていないことから須崎の日常の一部が見えたとともに、自分も須崎の住民になったような気分になれるまちあるきガイドであった。

このことからIの日常を体験できるこのコースでは、喫茶店に行き店主に出会えることや美味しいモーニングを食べられることが、まず地域資源であると言える。Iは、そのようなありのままの日常を外から来た人にも体験してもら



写真11 須崎の町並み

(出典：http://matinami.o.oo7.jp/sikoku/susaki.html)



写真12 須崎でのガイドコースから見える太平洋
(筆者撮影)

62) すさき女子ヒアリング調査 (2014年2月2日実施)

63) 茶谷幸治 (2012), 『「まち歩き」をしかけるーコミュニティ・ツーリズムの手ほどき』, 学芸出版社, p. 13

おうという気持ちでその地域資源を選び出す。そしてI自身が仲介役として案内することによって、地域資源に喫茶店の店主との語らい、猪肉のプレゼントやIによる須崎の情報などの付加価値が付く。そのとき地域資源は、参加者にとって得がたい観光資源に変化するといえる。このように、地域住民にとっての日常に存在する地域資源を、まちあるきガイドが選び出し案内することで、参加者にとっての観光資源になることがまず分かった。以下のまちあるきガイドについても同様に、このような資源の変化についてみていきたい。

「なりきり！ 須崎の歴史をちょこっと見聞散歩」

このコースは、ガイドのSが昔の人物のような衣装を纏って須崎の歴史ある場所として津野神社や発生寺を案内し、参加者も刀の玩具を持って歩くというユニークなスタイルである。刀はコースの途中で行われるミニゲームに使い、優勝者には景品として須崎のゆるキャラであるしんじょう君の飴を渡すことで、変化に富み、サプライズな内容も組み込まれている。ただ歴史を聞いて歩くだけではなく、昔の人物になりきって、まちあるきガイドと楽しく体を動かしながら学ぶコースである。歴史を語ると言ってもガイドはプロではない。しかし初心者でも分かりやすく丁寧に教えてくれていた。

ここでの地域資源は、衣装を工夫し楽しく案内を行うSというガイド自身や須崎の歴史、また道中の町並みなどである。その地域資源を選び出し案内するというプロセスの中で、参加者や地域住民が関わり合い、文化・歴史・景観という地域資源をより身近に感じることができる。こうした要素が関わる中で、さまざまな地域資源が観光資源へと変化するのではないだろうか。

また、すさき女子ガイドのHの案内で鮮魚店を訪れた。Hによるとその店主は、恥ずかしがり屋であるということだったが、よく話を

する中で熱烈な阪神ファンだということが分かり、その後話が盛り上がった。そんな元気な鮮魚店店主こそ須崎の大切な地域資源だといえるが、それはHが案内をして引き合わせてくれないければ、筆者やまちあるきの参加者と鮮魚店店主は会うことができず、話すこともできなかった。鮮魚店店主と参加者の間にHが仲介役を担うことで新しい関係性という観光資源が生まれたのである。このようにまちあるきでは数多く存在する地域資源をガイドが見極め選び出し案内することで、発見や喜び・出会い・思い出という目に見えない観光資源を多く得ることができる。

3-2-2 香川県東かがわ市引田【ガイドと歩く、引田味めぐりツアー】

「ガイドと歩く、引田味めぐりツアー」のコース内容は、まず醤油販売で栄えた屋敷を再生した讃州井筒屋敷からスタートし、江戸時代から続く醤油屋の蔵を見学し、そこで生成された醤油をかけたうどんを食べる。その後鮮魚店で、ハマチ漬け寿司丼（写真14参照）を食べたのち商店へ。店の前には昭和20～50年代の懐かしい生活道具が並び、店主の話や道具を通して昭和の暮らしを思い出し、それを商店の駄菓子を食べながら楽しめる。さらにまちあるきをすると地域住民ご用達の総菜店に向かい、生エビをすりつぶして作る郷土料理“えびそぼろ寿司”と素朴な甘さが天ぷらにマッチする“豆天”をどこか懐かしい店内を眺めながら食べる。最後に、旧引田郵便局のレトロな洋館を改装したカフェへ行くが、この店は登録有形文化財に指定されている。マダム感たっぷりの店主と話しながら特産品の和三盆を使ったシフォンケーキとコーヒーを楽しみ、店主と会話を弾ませながら懐かしい公衆電話やアンティーク家具に囲まれた優雅なティータイムを過ごすことができる。

以上のようなコースであるが、まちあるきガイドのMは、引田の港祭りや読み聞かせのボ



<http://tabi55.asia>

写真 13 引田の町並み⁶⁴⁾



写真 14 引田のハマチ漬け寿司丼 (筆者撮影)

ランティアなどを市内で行っている事務所から勧められて始めたそうだ。Mは香川県出身であり、東京ブギウギで有名な笠置シズ子の人形を持ち、腹話術ではないが一人二役のように参加者との楽しい会話を交えてガイドを行っていた。人形を持って案内して歩くことで、地域住民にまちあるきをしていると気付いてもらえることを狙いとしているようだ。

ここでの地域資源は、コースである駄菓子屋商店で昭和の生活道具を紹介してくれた店主、レトロなカフェやその店主などそれぞれの店・店主、そして讃州井筒屋敷といった町並みであ

る。また地域資源の中からそれらを選び出したMが、よその人が普段口にすることができない地域ならではの食を用意し、参加者に人形を利用してさらに楽しくガイドすることで地域住民と参加者の仲介役を担うとともに、M自身も楽しそうに案内をしていた。これら「食」や「人」を中心とした地域資源をMが参加者に紹介することで観光資源と変化し、おもしろいまちあるきができるのである。このように例えばまちあるきでなくても、醤油屋ではその醤油をかけたうどんを食べることができる。しかし、醤油の蔵で店主から醤油の歴史や蔵の説明、またそこでのMとの他愛もない会話という付加価値が引田の食という地域資源に加わることで、より一層心に残るひとときになり、引田を知ることにつながるのである。

このように様々な工夫がなされ、面白いまちあるきガイドが行われていたが、参加店舗や地域住民へのヒアリングにより新たに分かったことがある。まちあるきガイドに参加している店舗の店主は、参加店舗の意見がまちあるきガイドを運営している団体に通りにくいという不満を漏らしていた⁶⁵⁾ さらに、参加店舗以外の店の店主にもヒアリングを行ったところ、ガイドが参加店舗以外は前を素通りするだけで全く自分の店を紹介してくれない、自分もまちあるきガイドの参加店舗になるか、自分の店を少しでもいいから紹介してもらおうか、参加店舗以外の店にも立ち寄る時間を作ってもらいたいという悩みと要望を語っていた⁶⁶⁾ まちを案内する以上、運営側とそのまちが協力しあうことがまず大切だと考える。引田のまちあるきは、地域の食を中心に、ガイドと参加者と地域住民が繋がっている。そこに運営側が、さらにまちあるきガイドに携わっていない地域住民も加えて輪を広げることができれば、「食」というツール

64) 日本の残したい風景 (Japan Sightseeing Spot) 〈<http://www.tabi55.asia/?p=626>〉 (2015年2月28日)

65) ガイドと歩く、引田味めぐりツアーヒアリング調査 (2014年7月14日実施)

66) 同上

を通して引田のまちあるきガイドはさらに充実したものになるのではないだろうか。

3-2-3 香川県観音寺市【なつかしい路地裏 まち歩き】

観音寺観光協会が行っている「なつかしい路地裏まち歩き」は、1時間程度でなつかしい路地裏をあるき、出来立ての「蒸し焼きえびせんべい」、地元産のえびを手でねり込んだ揚げたての「えびてん」、特産品の「いりこ」などが味わえる⁶⁷⁾。そして、地元のエプロンガイドのFと共にのんびり食べあるきをしながら、まちを知ることができるまちあるきガイドとなっている。

コースに組み込まれている、蒸し焼きえびせんべいを販売している店は、明治10年創業で伝統の味と技法を受け継いでいる。この店では店主が、えびせんべいを作る際に出るせんべいの欠片を袋詰めしているものを多く分けてくれた。本来は、そのせんべいの欠片をもらうこ



写真15 観音寺の町並み (筆者撮影)

とはコースの内容に含まれていなかった。だが、店主の厚意からこのような形でまらうことができた。このことから、まちあるきの参加者に対する心意気やサービス精神があることがまちあるきガイドを通して感じられた。そのような店主の思いは、外の人にとって観音寺の人の温かさやまちあるきガイドへの協力的な姿勢が感じられる大切な地域資源である。この地域資源はガイドによる紹介で、会話や食・景観といった付加価値がさらに加わり、観光資源へと変化する。

このような、店主の温かい気持ちや前節で紹介したドア (写真10参照) など自分の住むまちには無い珍しいものも地域資源である。また、それはガイドなしでは見つけることは難しく、発見できたとしても深く理解することはできないかもしれない。そのまちに住む人の話を聞いてあるくことで、ガイドブックやインターネットだけでは得ることのできない多くの情報に触れ、感じるができる。そのような参加者の発見にまちあるきガイドが加勢することで会話が生まれてつながりができ、地域資源が観光資源に変化していくのであろう。

以上の事例から、それぞれの地域に数多く存在する地域資源というものは、文化や歴史・景観その他にも地域に住む人や、食、地域住民の地域への思いなど地域住民の暮らしにまつわるものであることが分かった。それは地域住民にとっては自分たちの当たり前の日常であるが、参加者にとっては地域資源や観光資源になることが分かった。ここで三つの事例を比較してみると、地域資源は地域ごとの魅力であり、そこにしかないものも多い。そこで地域資源の中からまちあるきガイドが好きなもの、参加者に紹介したいものを選び出し、コースの立ち寄り店の店主などの地域住民を巻き込んで参加者に紹介することで、どの地域でも地域独自の価値が生まれたのである。ただ訪れるだけでは出会わなかった人との出会いや会話、まちあるきガイド自身のまちあるきに対する工夫や思いなどと

67) 路地裏まち歩きホームページ〈<http://kanonji-kankou.jp/play/01/001.html>〉(2015年2月27日)

いった付加価値が、まちあるきには生ずるのである。また見方を変えれば、まちあるきガイドが存在することで地域内に留まっていた地域資源を外に発信できるともいえよう。そしてあらゆる点と点がつながることで地域資源が観光資源に変わるといえるプロセスができるのではないだろうか。

3-3 観光ゾーンが極めて少ない地域におけるまちあるきの可能性

前節でも述べたように、日常と非日常は地域に共存しているとされる。長崎さるくの行われている長崎市でも、大浦天主堂やグラバー園などの非日常空間とすり鉢状の住宅街などの日常空間が共存していた。前節では、本稿で長崎市と比べて観光ゾーンの少ない地域とされている須崎市、引田、観音寺市でも、わずかな非日常と日常が共存しながらも豊かなまちあるきガイドが成立していることが分かった。では最後に、こうした地域で地域資源が観光資源になるプロセスをさらにみていきたい。

3-3-1 何故面白いまちあるきができているのか

これまで見てきたように、観光ゾーンが極めて少ない地域でも観光ゾーンの多い地域と同じように面白いまちあるきガイドができることが分かった。それはどうしてだろうか。もう少し掘り下げて考えてみよう。

例えば須崎では、ガイドが自分たちの普段利用している喫茶店に案内し、そこでモーニングを食べながら語らうというコースがあった。地元の喫茶店で一緒にモーニングを食べて話す、ということが何故観光資源になりうるのかという意見があるかもしれない。だが、ガイドと話したことは筆者にとって今でも記憶に残っており、喫茶店の店主にいただいた手作りのお土産の味と優しさは今でも思い出することができる。また、ガイドが案内してくれた鮮魚店では、まちあるきガイドの立ち寄り店舗となることで参

加者と話す機会が増えたという。ガイドが地域住民や場所、習慣などと参加者を繋げてくれたからであり、同様なことは引田でも体験した。引田味めぐりツアーでは、様々な地元の店に案内してもらい、地元でしか食べられない料理を味わうことができた。さらに、まちの一角にあった職人さんの砂糖細工も、普通にまちを歩いていただけでは見逃していただろう。一方、観音寺のまちあるきガイドでの立ち寄り店舗の蒲鉾屋では、まちあるきガイドに来ていた参加者との出会いによって売上げが伸びたそう。これもまちあるきガイドの一つの効果といえることができるだろう。

3-3-2 ガイドが果たす重要な役割

これまでみてきたように、この三カ所では、ガイドが非常に重要な役割を果たしていた。一点目は、その地域の人々や場所、習慣などと参加者を繋げる橋渡しの役をしていることである。三カ所ではそれぞれ、ガイドが地域と参加者を繋いでいる。ガイドがもしいなかったら、その地域の人や面白い場所には出会うことはなかったかもしれない。また、出会ったとしても、詳しいことは知りえなかったし、思い出には残らなかったかもしれない。その意味でまちあるきガイドの存在はとても大きい。

二点目は、地域資源を観光資源に変えるということである。地域には面白い資源がいくつも眠っており、それは観光ゾーンが少ない地域でも同様である。三カ所のまちあるきガイドで見てきたものは神社や祠、像や古い建物や町並みであった。それらの案内も楽しかったのであるが、三カ所のまちあるきガイドではそれ以外の面白いものやことも数多くあった。それは須崎の喫茶店モーニングでの語らいの時間、引田の駄菓子屋の店主の昔話、観音寺の煎餅屋の店主の優しさなど、普通の観光では体験しにくいものである。地域資源には、目に見えるものだけでなく、「人との繋がり」も含まれており、それはただまちをあるいていただけでは感じるこ

とはできない。つまり地域住民であるまちあるきガイドの目線で観光客がまちを見ると、案内される中で自分の目線として「日常」を見つめることができ、それを資源として感じることができるようになるのであろう。

3-3-3 地域資源を観光資源に変える

観光ゾーンが極めて少ない地域で面白いまちあるきガイドをするには、ガイドが地域の人々や場所、習慣などと参加者を繋げ、地域資源を観光資源に変えることが必要だと分かった。そして、むしろこの地域資源を観光資源に変えるということは、観光地より観光ゾーンが元々少ないところあるいは特に目立ったところのない普通の地域の方がやりやすいのかもしれない。それは、観光資源というすぐに目に付くものに流されることがなく、小さなものでも見つけてピックアップすることができやすいからではないだろうか。

観光ゾーンが多く、まちあるきガイド発祥の地長崎市で行われている長崎さるくでは、名所旧跡や地域の歴史を重視するガイドも一定数存在することは、2章のアンケート結果からもわかることである。具体的には「お客様は地域の歴史を知りたくて来ている」、「名所旧跡を見たいと思っている」と考えているガイドも多く見られた。確かに観光ゾーンが多い地域では、どうしてもそこにある名所旧跡や歴史がある場所

を案内する傾向が出やすくなるのかもしれない、観光ゾーンが多い地域よりも、観光ゾーンが極めて少ない地域の方が、結果として地域資源をうまく活用しやすいと考えることもできるのであろう。

さて、まちあるきガイドで地域資源を観光資源に変えるプロセスは、実際どのようになっているのだろうか。まずガイドが地域に眠っている資源を自分なりにピックアップし、まちあるきガイドのコースに取り入れる。それを参加者に興味深く紹介することで、参加者にとって観光資源になることができる。このプロセスを図化したものが図10である。図の①の黒い丸は地域に眠る資源を表す。その地域に眠る資源をガイドが図の②で選び出して楽しく工夫して案内する。それらがさらに丸で囲まれた部分である。最後に、図の③でその地域資源をガイドが詳しく案内することで参加者にとって観光資源に変わるのが星印になった部分である。この図の場合、最初のピックアップ作業がまず大切になる。ガイドが普段見ている面白いと思ったものや、ガイドの好きな場所や好きなものごとを選び出す。またガイドが参加者と共有したいと思う「好きな時間」というのも選び出す上で重要なポイントである。そして選び出された地域資源を、ガイドがそれぞれ工夫をして参加者に紹介していく。須崎では個性あふれるガイドが面白く話したり、昔の人物のコスプレをしたり

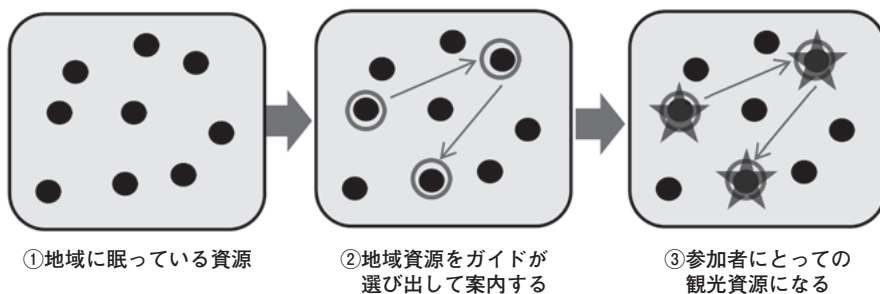


図10 地域資源が観光資源へと変わるプロセス (筆者作成)

歴史的事実に基づきながらもレクリエーションも交えながらも案内を行っていた。引田では地元の有名人物の人形を使ってガイドをし、観音寺ではエプロンを着て案内をしていた。このような参加者を飽きさせず、まちあるきガイドと一目でわかる工夫も大切である。こうしたプロセスを経ることで、地域に眠っている資源がまちあるきガイドによって参加者にとっての観光資源となるのであろう。

3-3-4 これからの展望

地域に眠る資源を掘り起こしや、楽しくガイドをすることによって、観光ゾーンが極めて少ない地域でも面白いまちあるきガイドをすることができることがまず分かった。また、そうした中ではまちあるきガイドが重要な役目を果たし、またガイド自身もこのような自分の役目をしっかりと理解している。例えば、事例紹介に出てきた須崎のまちあるきガイドのIは、「須崎の日常を見てもらいたい」と述べ、自分も通う地域住民行きつけの喫茶店をコースに組み込んでいた。このことからそれがよく分かるが、これまで述べてきたように、観光ゾーンが極めて少ない地域でのまちあるきガイドは有効な手段であるが、さらにまちあるきの運営側と地域住民と参加者が繋がっていくことが、観光ゾーンが極めて少ない地域でのまちあるきガイドがさらに発展し、地域に貢献していく上で必要なことではないだろうか。

終 章

本稿では、従来のガイド、観光ボランティアガイドとまちあるきガイドとの違いを明らかにするために議論を進めてきた。

まず1章では、ガイドにまつわる観光の歴史や社会的背景からみて、観光ボランティアガイドやまちあるきガイドはマスツーリズムからの脱却と観光客のニーズの多様化に呼応して生まれてきたガイドであるということが言える。ま

た個人型観光という今の時代の観光やその先の観光も意識されているということもできるであろう。

2章では年に、松山観光ボランティアガイドと長崎さるくを比較し、意識の違いやコース内における重視度の違いについてみてきた。観光ボランティアガイドを一方向の「知識型」ガイド、まちあるきガイドを双方向の「交流型」ガイドと捉えてみた。しかし、両ガイドには混在している点が多く、茶谷が考えるようにはまちあるきガイドとして分化しているとは言い難い部分もあることがわかった。そうした中で「まちあるきガイド」にとって観光ボランティアガイドと差別化を図る部分は道のりにあると考えた。なぜならガイドと参加者が共にあるく道のりの中で、まち本来の姿を見聞きすることが、“あるく”意味であると考えからである。まちあるきガイドはそうした観光ボランティアガイドのような観光スポットでの説明だけでは得られない面白さを「まちあるき」という行為を通じて見出すことができるガイドである。

3章では、観光ゾーンが極めて少ない地域でのまちあるきガイドの可能性について論じた。今までは長崎のように観光ゾーンが多い地域でなければまちあるきガイドは行われにくいのではないかという疑問もあったが、実は観光ゾーンが極めて少ない地域の方がむしろまちあるきガイドを実施しやすいということに言及した。観光ゾーンが極めて少ない地域には、観光資源は少ないものの隠れた日常に地域資源が多く眠っている。それをガイドが発見しまちあるきガイドコースに組み込み、いかに面白く案内するかが大切である。また、地域資源を観光資源に変え、まちあるきガイドを実施していく中で、運営側、ガイド、地域住民、参加者がさらに連携していくことが重要だということも指摘した。

これまでまちあるきガイドについてみていく中で、まちあるきガイドが観光における新しい価値を創造する過程を垣間見てきたが、ガイド

がピックアップする場所や案内の仕方、地域住民との交流の仕方等は様々だが、いずれも地域住民と参加者を繋げる仲介役としてガイドが機能し、新たな観光における価値を創造するためにガイドが重要な役割を担っているのである。

本研究では研究上の課題も多く残されている。一点目として、まちあるきガイドの参加者や周辺の地域住民にアンケート調査を行うことができなかった点である。今回は主にまちあるきガイド組織やガイド、コースに参加している店舗を対象にアンケート調査やヒアリング調査を行った。そのため、まちあるきガイドが参加者のニーズに合っているのか、また地域住民にとって必要とされているのかという疑問がまず残る。

二点目は、2章より観光ボランティアガイドとまちあるきガイドの分化ができていない点である。まちあるきガイド自身が「まちあるき」という行為の価値について改めて見直す必要があるのではないだろうか。そういった中で、観光ボランティアガイドとの差別化を図るために何が必要なのかということを追究していきたい。

最後に、今回取り上げたガイドの他にも、まだまだ特色あるまちあるきガイドが存在する。そうしたまちあるきガイドの調査も今後必要になってくる。またそうした残された課題を解決するため、先進事例の長崎さるくを始め、他のまちあるきガイドや参加者、地域住民等様々な視点から、まちあるきガイドについてさらに研究を深めていきたい。

参考文献

立教大学観光学部 (2008), 『交流文化 2008. volume 07』
旅の文化研究所 (2011), 『旅と観光の年表』河出書房新社
JTB 総合研究所 <<http://www.tourism.jp/glossary/mass-tourism/>> (2015年2月28日)

田口秀夫・木村一裕・日野智『観光ボランティアガイドによる対話型情報提供の意義とその評価』【土木計画学研究・論文集 Vol. 27 no. 2 2010年9月】
公益社団法人観光振興協会 (2015), 『第5回通訳案内士制度のあり方に関する検討会報告資料』
佐々木一成 (2008), 『観光振興と魅力あるまちづくり』, 学芸出版社
寺村安道 (2009), 『地域観光と地域振興－観光ボランティアガイド組織の活動事例から観光まちづくりを考える－』, RSPSP Discussion Paper No. 12
安村克己 (2008), 『いま、なぜ「観光」か? 「持続可能な観光」の教訓』, Regional Futures NO. 12 Jul. 2008
公益財団法人日本交通公社 (2013), 『観光地経営の視点と実践』, 丸善出版
茶谷幸治 (2012), 『「まち歩き」をしかける－コミュニティ・ツーリズムの手ほどき』, 学芸出版社
観光ボランティアガイド(松山ボランティアガイドの会)とまちあるきガイド(長崎さるく)に対して、ガイドに対する報酬は無料がよいか、有料がよいかという意識調査
松山市ホームページ <<https://www.city.matsuyama.ehime.jp/shisei/matsuyama/iti.html>> (2015年2月27日)
<<http://www.city.matsuyama.ehime.jp/kanko/kanko/guide/kyodogeino/yakuyuken.html>> (2015年2月28日)
松山商工会議所ホームページ
<<http://www.jemcci.jp/news/201408/furusato.html>> (2015年2月21日)
長崎市ホームページ <http://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/790001/7920001/p007351_d/fil/02dai1syo.pdf> (2015年2月28日)
「ながさき」を歩く! 長崎さるく公式ホームページ “長崎さるくとは”
<<http://www.saruku.info/outline.html>> (2015年2月13日)
高知県須崎市ホームページ <<http://www.city.susaki.kochi.jp/>> (2015年1月22日)
<http://www.city.susaki.kochi.jp/01_sougouannai/machino_aramashi/shino_syokai/gaiyou/gaiyou_top.html> (2015年2月28日)
東かがわ市引田ホームページ <<http://match345.web.fc2.com/kagawa/hiketa/>> (2015年2月27日)
観音寺市 <http://www.city.kanonji.kagawa.jp/city_n/profile.html> (2015年2月27日)

- 国内観光スポット・イベント情報はじゃらん net-
観音寺 なつかしい路地裏味めぐり 〈http://www.jalan.net/kankou/spt_37205aa6712081995/〉 (2015年2月27日)
- 茶谷幸治 (2012), 『『まち歩き』という手法と『まちづくり』』, 『都市計画 61(1)』, 日本都市計画学会
- 米田誠司 (2014), 『観光と日常の境界をめぐって - まちあるきガイドからみる -』, 第29回日本観光研究学会学術論文集
- 日本の残したい風景 (Japan Sightseeing Spot) 〈<http://www.tabi55.asia/?p=626>〉 (2015年2月28日)
- 路地裏まち歩き 〈<http://kanonji-kankou.jp/play/01/001.html>〉 (2015年2月27日)
- ジョン・アーリ (1995) 『観光のまなざし-現代社会におけるレジャーと旅行』, 法政大学出版局